令和８年２月20日
教育課程部会
外国語ワーキンググループ
資料 2

英語教育における
AI活用の基本的な考え方
―学習指導要領の資質・能力を育成する観点から―

京都大学国際高等教育院
金丸 敏幸

KYOTO UNIVERSITY

京都大学

教育課程部会 第9回 外国語ワーキンググループ
2026年2月20日(金) 13:00～15:00

WGが見据える本質的意義とAIの位置づけ

伝わらないもどかしさや失敗を乗り越えるレジリエンスや
伝わることによる自己肯定感等の高まり，それらを行き来する経験

「AI時代に外国語を必修とする「本質的意義」の再整理（Ver.3）」

この「レジリエンス」を育てるために、AIはどう位置づけられるべきか？

成果物が容易にできる

→ 翻訳や作文などの成果物を中心とする評価モデルが揺らぐ

時間も機会も不足

→ EFL環境では，学習（練習）状況の改善が急務

「使えない」という認識

→ 英語ができるという到達像そのものの転換が必要

中核概念：コミュニケーション・レジリエンス

—「見方・考え方」の改善と「発信力強化」を統合する概念—

コミュニケーション・レジリエンス

完全さを前提にせず，相互理解を更新しながら相互行為を維持し，かつ主体的に自らの考えを形成・発信・再構成し続ける志向性と実践

軸1：更新的理解

受容：止まらずに追い続け，理解を回復する

相互行為：質問や言い換え等で，相互理解を漸進的に形成

軸2：更新的発信

産出：相手の理解を把握しながら，表現を更新する

内容深化：伝えたい内容そのものを，対話の中で深化・再構成

AIの役割：学習者の「更新行為」を増やす
→「反復・個別化・省察支援」

京都大学

AIの位置づけ：学習基盤としての3つの機能

資質・能力の育成を「支える条件」としてのAI—目的ではなく手段

1. 反復

短時間・高頻度の練習で学習機会の総量を増やす

→ 恥ずかしがらずに，大量の練習が可能
使用機会の不足を補う

2. 個別化

学習者の知識・技能・関心に応じた調整が可能

→ 児童生徒に応じた教材作成，興味関心に即した例文生成など
多様な学習者を包摂

3. 省察支援

即時FBで更新行為の改善サイクルを回す支援

→ 試行→FB→再試行の循環を短時間で実現
「何が変わったのか」

生成AIを活用した英語教育強化事業の振り返り

AIの強みを活かした（産出）言語活動の充実

「話すこと」における活用場面

- AIからのフィードバックを受け，発音等の改善
- ペアワークでAIとやり取りし，表現の幅を広げ，考えを深化

「書くこと」における活用場面

- AIを相手にした書く内容に対する壁打ち（ディスカッション）
- AIからのフィードバックを踏まえ，推敲や校正

参加団体：46団体　モデル校：326校

（写真出典）令和6年度「小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業」（AIの活用による英語教育強化事業）最終成果報告会　事務局資料

事業が示すもの：学習状況の改善は行動を変える

		A1未満	A1	A2	B1以上
中1	事前（n=722）	82.1%	17.9%	0.0%	
	事後（n=763）	60.6%	**39.2%**	0.3%	
中2	事前（n=1,096）	75.8%	22.3%	1.9%	
	事後（n=1,008）	54.6%	**41.0%**	4.5%	
中3	事前（n=1,528）	50.1%	38.2%	9.7%	2.0%
	事後（n=1,448）	34.8%	**49.5%**	11.7%	4.0%
高1	事前（n=1,311）	5.1%	38.3%	45.8%	10.8%
	事後（n=1,293）	**1.9%**	36.3%	47.7%	**14.1%**
高2	事前（n=1,966）	4.0%	38.8%	42.5%	14.7%
	事後（n=1,780）	3.4%	28.1%	**53.8%**	14.7%

原則1：個別化はAI, 最適化は教員

→ AIの効果は教員の指導力に依存

原則2：効果は授業設計に依存

→ 目的にあった導入と活動の一致が重要

※A1未満～B1以上はCEFRレベル相当

教師・ALT・AIの位置づけと役割分担

代替ではなく，お互いの連携による相乗効果を目指す

教師

設計者・最適化者

- 単元全体の設計と指導改善
- AI活用の目的・方法の決定と調整
- 学習者の状態把握と適宜介入

ALT

（他者）・対話者

- 文化的・言語的に異なる他者との意味交渉
- コミュニケーションの「本番」相手
- AIで代替できない，人間同士のリアルな対話

AI

練習・学習基盤

- 個別化された反復練習
- 即時フィードバックやリアルタイムの会話
- 知識・技能に応じた言語材料や問題の生成

校種別：AI活用が効果的な場面
―コミュニケーション・レジリエンスの観点から―

小学校
試行・聞き流し

AI活用：補助的な活用
- 反復練習で安心感（完全に分からなくても大丈夫）の醸成（FLAの低減）

教師・ALT：積極的な交流
- リアルな言語体験
- ジェスチャーや絵などの非言語情報

中学校
会話練習・添削

AI活用：安心できる対話
- 複数ターンの会話練習や添削からの英文修正を経た外化（languaging）

教師・ALT：定着の支援
- 個人に合わせたフィードバック調整
- 基礎的コミュニケーション方略の指導

高等学校
批判的更新

AI活用：批判的活用
- 対話を通じた表現，内容等の随時更新
- 複数の情報の統合や取捨選択

教師・ALT：最適化の補助
- コミュニケーションを持続する力の育成
- 成果物ではなくプロセスを重視

※ 語彙や文法だけでなく，談話標識や定型表現などのコミュニケーション継続に必要な知識・技能の指導

AIによる授業内と授業外の連携

授業内

人とのコミュニケーション

- 学習者同士や教師・ALTのやり取り
- その場で振り返る個人省察の時間

AIの活用場面

- 学習内容の定着のための練習
- 個別化された言語材料とフィードバックの提供（省察のもと）

授業外（家庭学習）

自己調整学習のミニサイクル

- 計画→練習→省察→調整を実施
- 成果物を目的としない

AIの活用場面

- つまずきの確認や修復
- 「できる（わかる）ようになったこと」を次の授業に繋げる

授業外での英語使用機会の確保や充実

地域特性を活かした活動

外国人観光客や地域の在留外国人との英語による交流

オンラインでの海外交流

AIによる事前準備や補助
通訳で交流の継続と深化

京都大学

パフォーマンステストの転換：妥当性の確保

AI時代は成果物の質が学習者の内部状態を反映しない
➔「何を測っているのか」という根本問題に直面

表面的なアウトプットだけに依らない，プロセスの評価の仕組みが必要

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
コミュニケーションを続けるための知識・技能 • 談話標識や定型表現の使用による理解の修復や継続など，**リアルタイムの運用能力**	**コミュニケーションに対するメタ認知能力** • 改稿時の差分や更新過程における判断の記録 • 最終的なアウトプットではなく，「**どのような思考・判断を経たか**」を重視	**レジリエンスの情意的側面の醸成** • 困難に対面した際，理解や対話を継続しようとする態度 • 事後の**省察記録**が重要

※ 評価を行う教師のサポートへのAI活用も重要

教育委員会に求められる「伴走」の設計

ツールの導入ではなく，授業設計支援・制度設計・研修のセットで推進

授業設計力を中心に据えた研修体制の整備

→ AIの技術的研修だけは不十分
単元や評価の設計力向上に向けた研修
「AI活用の成否は授業設計の質に依存」

AI活用の機会保障と格差防止の制度的担保

→ 家庭学習環境の差が英語力の格差に直結しない仕組みの導入
「AI活用が一部の学校に留まらないこと」

先行事例の知見の組織的共有と蓄積のプラットフォーム

→ 先行事例の分析から地域特性に合わせた活用・運用方法の共有
「どのような設計条件で成果が生じるか」

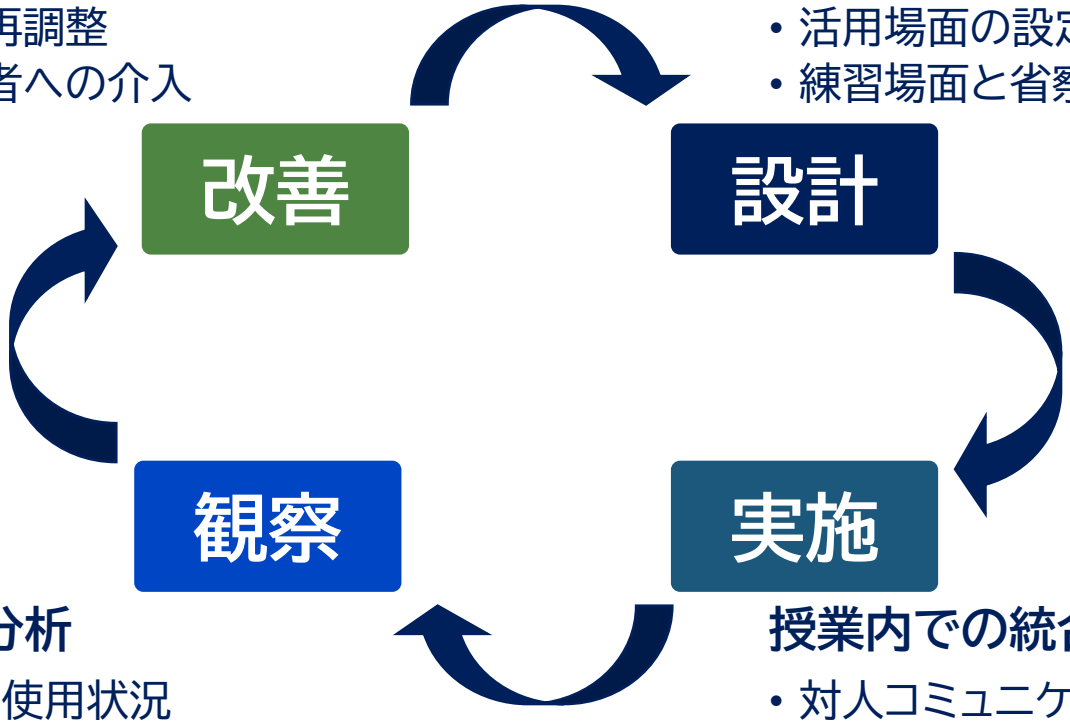
各学校の実態に応じた柔軟な対応方針と支援

→ AIの利用範囲や透明化に関する方針の制定や校内ルール策定の支援
「選択可能な具体的なリストの作成」

AI活用を通した指導のサイクル

設計と指導へのフィードバック
- 活用場面の再調整
- 個別の学習者への介入

単元目標に合わせた活動設計
- 活用場面の設定
- 練習場面と省察内容の検討



学習記録の分析
- 知識・技能の使用状況
- 学習者の行動変容の確認

授業内での統合的な実施
- 対人コミュニケーションへの接続
- 最適化に繋げる指導

京都大学

提案：学習指導要領のAI活用の位置づけに向けて

1. AIを学習基盤として位置づけ，導入場面を明確にする
2. 「コミュニケーション・レジリエンス」の育成という観点から，AIとのやり取りを段階的に活用する
3. 校種ごとに，AI活用が効果的な場面と教師やALTの役割を具体的に例示する
4. 授業内外の連携を前提に，AIを自己調整学習の導入の仕組みとして再設計する
5. 授業設計において，どのようにコミュニケーションへと繋げるかを意識する